

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 13 日現在

機関番号：33937

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K13826

研究課題名（和文）終末期に至る要介護高齢者の食事摂取困難に対する食事ケアモデルの有用性に関する研究

研究課題名（英文）A Study on the Usefulness of a Dietary Care Model for Difficulty in Dietary Intake in Elderly People Requiring Care Toward the End of Life

研究代表者

三好 弥生（Miyoshi, Yayoi）

愛知東邦大学・人間健康学部・教授

研究者番号：60388072

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、「終末期に至る要介護高齢者の食事摂取困難に対する食事ケアモデル」の有用性を検証することを目的としていた。しかし、2020年度に採択された当初より2023年度まで、研究期間を通してずっと新型コロナウイルス感染症の影響により高齢者介護施設において調査を実施することが困難な状況が続き、研究を進めることができなかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

新型コロナウイルス感染症による影響により、モデルの有用性について調査ができず、研究成果を得ることができなかった。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to verify the usefulness of the “Dietary Care Model for Difficulty in Dietary Intake in Elderly People Requiring Care Toward the End of Life.” However, from the time the study was initially adopted in FY2020 through FY2023, it was difficult to conduct the study in elderly care facilities due to the impact of the new coronavirus infection throughout the study period, and the study could not proceed.

研究分野：介護福祉 高齢者福祉

キーワード：食事介護 食事ケアモデル 食事摂取困難 看取り介護 終末期に至る要介護高齢者 介護職

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

研究成果報告書

1. 研究開始当初の背景

かつて、高齢者への医療は、終末期にあっても個々の症状に対して最期まで積極的な医療を施すことが当然となっていた。2000年頃からは、認知症の進行などによって経口摂取が困難になった高齢者に対して、安全かつ簡便な栄養補給法として経皮的に胃瘻を造設する PEG (Percutaneous Endoscopic Gastrostomy) が、急速に普及してきた (仲口 2012)。しかし、終末期医療の動向は、高齢者本人の尊厳を守るなど倫理的な観点から、その適応は慎重であるべきとの見方へ変わっていった (日本老年医学会 2012)。

一方で、在宅医療が推進されるようになり、介護保険施設の介護報酬に看取り介護への加算が創設されるようになるなど、医療的介入の少ない高齢者の看取りが政策的に推進されるようになった。この背景の一つには、終末期に過剰な医療を望まず、自宅や高齢者介護施設など生活の場において最期を迎えたいという利用者や家族の看取りニーズの増大と多様化がある。

高齢者の終末期像は、老衰に加え認知症や各種慢性疾患の進行などにより、複雑な心身の状況を呈する。また、老衰により死に至る過程において、経口による食事摂取困難が看取り期へ移行する目安になることが明らかにされている。これらのことから、今後医療の介入が少ない老衰死の看取りには、終末期に至る食事ケアはより重要度を増すと考えた。

そこで、特別養護老人ホームで調査を実施した結果、食事ケアの未熟な介護職は、摂食嚥下が難しくなっている利用者への食事介助には、誤嚥の恐れなどによる不安を有していることを確認した (三好ら 2014)。しかし、そうであっても介護職は、日々高齢者の命を預かる責任を負い、それ故に高齢者が食事を摂取することへの強い思い入れをもって、食事介助を実践している現状があることも明らかとなった。また一方で、経験を重ねることで、高齢者に食べることを無理強いしているかもしれないなどと、自己のケアのあり方に疑念を生じるようになっていくことや、さらに経験を積み重ねることで、どこで止めるべきか判断できるようになるなど、経験によって技術力が向上していくことが推察された (三好 2016)。これらの研究結果に基づき、要介護高齢者を看取る、介護職の食事ケア実践に役立つモデルの構築に向けて、摂食嚥下困難者への食事介助経験が豊富な介護職が積み重ねてきたケアの経験知に着目し、安全な食事ケアの方法を導き出すことを考えついた。

2. 研究の目的

申請者は、科学研究費の助成を受け、実際に食事摂取に困難を抱え深刻な状態にある要介護高齢者の事例 17 件を継続的に観察、分析し、各々の事例がどのように食事摂取が困難となっているのかその詳細を明らかにするために、摂食嚥下 5 期モデルや小山による KT バランスチャートなどの知見を参考にこれを評価する方法を検討し、終末期に至る要介護高齢者の食事摂取困難を評価する項目を設定し、評価した。同時に、評価結果の類似点や相違点に着目して分類を進め、「終末期に至る食事摂取困難事例の類型 (案)」を作成した (三好ら 2019)。また、これをもとに「食事摂取困難のタイプ別食事ケア方法 (案)」を整理した。

今回の科学研究費の助成では、これらの食事ケアモデルの実用性を向上させるために、介護職による有用性の検証を通して信頼性を高め洗練化することを目的とした。本研究の問いは、この食事

ケアモデルは終末期に至る要介護高齢者の食事ケアを実践する上でどこがどのように有用であるか、何が課題となるのかということにある。

3. 研究の方法

この食事ケアモデルの有用性は、高齢者介護施設において介護職が使った上で検証することが必要であると考え、調査対象は、実証研究に協力の得られた高齢者介護施設 4 件程度、そこに従事する介護職員計 100 名程度とした。

研究の進め方は以下 ~ のとおりである。このうち調査は ~ の 4 つ過程を段階的に進めていく。

<調査第 1 段階> 介護職員に、食事ケアモデルについて、評価項目や評価基準、食事摂取困難タイプ各々の特徴、具体的なケア方法の例などを説明する。同時に、終末期に至る要介護高齢者の食事摂取困難を評価する「評価シート」を配布し、記入方法について説明する。

<食事ケアの実施> 介護職に「評価シート」を用いて対象利用者を評価してもらい、その結果を踏まえ、タイプ別食事ケア方法を参考に食事介護を考えて、食事ケアを実践してもらう。

<調査第 2 段階> 食事ケアを実践した事例の検討会などに参加し、食事ケアモデルがどのような対象にどのように使われているのかなど活用状況を観る。また、これらの結果を整理し、適宜、実務に携わる専門家である研究協力者より助言を受け、より適切な活用に向けて検討する。

<調査第 3 段階> 調査票を用いて食事ケアモデルの有用性や問題点を調査する。

調査票による調査結果を分析し、食事ケアモデルの有用性と課題点を析出する。

食事ケアモデルを修正し、洗練化する

学会で成果発表をする

4. 研究成果

令和 2 年度に採択された当初より令和 4 年度まで、研究期間を通してずっと新型コロナウイルス感染症の影響により高齢者介護施設において調査を実施することが困難な状況が続いた。令和 5 年 5 月ようやく新型コロナ感染症は「2 類相当」から季節性インフルエンザと同じ「5 類」に引き下げられることとなり、これによって実証調査の可能性が出てきたため、令和 5 年度 1 年間の延長を申請し、研究実施のタイミングを図っていた。しかし、その後も重度要介護高齢者への感染リスクは変わりなく、高齢者介護施設においては厳重な感染症対策が継続される状況が続いた。結果的には、研究を実施することができず、研究成果は得ることができなかった。

文献

- ・仲口路子 (2012) 「PEG (胃ろう) 問題 - 認知症高齢者への PEG の適応について - 」 『Core Ethics』 8, 291-303 .
- ・日本老年医学会 (2012) 『日本老年医学会立場表明 2012』
(<https://www.jpn-geriat-soc.or.jp/tachiba/jgs-tachiba2012.pdf>.2024.6.10)
- ・三好弥生・上田恵理子 (2014) 「特別養護老人ホームにおける看取りの現状と課題」 『高知県立大学紀要社会福祉学部編』 63, 133-117 .

・三好弥生 (2016) 「要介護高齢者の誤嚥を防ぐ食事ケアに関する基礎知識」『四国公衆衛生学会雑誌』61 (1), 57-62 .

・三好弥生・片岡妙子・浅沼高志・ほか (2019) 「終末期に至る食事摂取困難事例の類型案」『高知県立大学紀要社会福祉学部編』68, 15-24 .

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------